

Y25a 5月21日金環日食による眼障害の発生状況

大鹿哲郎（筑波大学，日本眼科学会），尾花 明（聖隷浜松病院）

（財）日本眼科学会では，5月21日朝に見られた金環日食による眼障害の発生状況を，学会会員を通じて調査した．日本眼科学会の会員に呼びかけ，ウェブページでの症例登録あるいは登録フォームのファックス送信により，症例データを収集した．抄録執筆時点での報告状況は下記の如くである．寄せられた症例のうち，“症状がないが念のため受診した”“心配なので受診した”など，自覚症状がない例は除外した．また，症状が日食と関係ないと主治医に判断されたものも除外した．その結果，546例の報告があり，その年齢は2歳から92歳．12歳以下は51例であった．35都道府県から報告があり，その内訳は北海道，青森県，宮城県，秋田県，山形県，福島県，茨城県，栃木県，群馬県，埼玉県，千葉県，東京都，神奈川県，石川県，福井県，山梨県，長野県，岐阜県，静岡県，愛知県，三重県，滋賀県，京都府，大阪府，兵庫県，奈良県，和歌山県，鳥取県，島根県，岡山県，広島県，徳島県，香川県，愛媛県，沖縄県であった．悪天候であった九州（沖縄を除く）からの報告はなかった．

問診によると，症例の3/4が裸眼で観察を行い，日食グラスを使用したものが1/7，日食グラス以外の器具を使用したものが1/7，カメラでの撮影を行ったものが16例であった．症状としては，視力低下，眼痛，違和感，羞明，残像，ぼやけ，熱感，ゆがみ，暗点などがみられた．症状は2/3の症例で1日以内に回復したが，調査時点で48名に症状が持続していた．眼底写真や光干渉断層撮影による明らかな網膜の異常が20例にみられた．回答が得られた症例のうち，3/4はマスコミなどを通じた啓発によって眼障害の危険性を知っていたが，1/4は情報を知らなかった．

今後，症例データ収集をさらに積み重ね，また症状の転帰の調査を行って，報告する．